震災に怯まなかった芦高生

第17代学校長　伊藤　正広

芦高・あしかび会関係者の皆様、芦高創立60周年を迎えられ心よりお喜び申しあげます。

平成７年１月17日未明、突然襲った未曾有の阪神・淡路大震災の日から５年が経ちました。

芦屋市全域が激甚災害地と化し、都市機能が完全に麻痺する中、芦高生３名の尊い命を失い、校舎も南館・中館が損壊し、使用不能になるなど芦高校史に残るあまりにも悲惨な出来事でありました。グラウンドは、自衛隊のテントや車両等で埋め尽くされ、外部との連絡も跡絶え、ライフラインが完全にストップする緊急事態そのものでした。生徒・職員の安否の確認、1000名を超す避難所の対応、仮設トイレや生活用水の確保、３年生の進学対策、残存施設を利用した授業の再開等緊急を要する難問山積の中、大きな混乱もなく、よくぞ耐え凌ぐことができたものと思います。これはいつに生徒・職員をはじめＯＢや市民の皆様のご協力と心のこもった行動力の賜物であると、今さらながら頭の下がる思いがいたします。

教育綱領「自治・自由・創造」のもと、自治会と職員が一体となって「校舎はつぶれても芦高は健在」と奮い立ち、「復活への礎」のテーマのもと必死に取り組んだ記念祭、苦労しながら実施に漕ぎ着けた伊丹での県西定期戦、暗愁を乗り越えて県高校総体で決勝戦まで勝ち進んだサッカー部の活躍等に象徴されるように、震災で体験した復興へのエネルギーこそ「生きる力」であることを学んだように思います。

校舎もグラウンドも整備された今、2000年の節目の年60周年を機に新たな時代に向けて一層充実発展されますことを心よりお祈りいたします。